

幽霊養成講「うらめし家」

坂東誠一

千夏（語り）「霧が立ち込める広い河原を私は一人とぼとぼと歩いてきた。白い着物を身に纏い、白い足袋を履いている。そして、額には白い三角形の紙。そう、私は死んだんだ。目の前を流れる大きな河を渡ったら、きっとあの世に辿り着くんだろう。昔、おばあちゃんからそんな話を聞いた気がする。けど、このままあっさり河を渡る訳にはいかない。私にはやり残したことがあるんだ。あの世になんか行ってたまるか。そう思ってるうちに、一軒の大きなお屋敷が私の目の前に現れた」

重そうな木の扉がゆっくり開いていく。

中から三味線の音が流れてくる。

千夏（語り）「お屋敷の扉を開けると、そこには荒れ放題の日本庭園と古い日本家屋があり、その玄関脇には『幽霊養成講座うらめし家』と書かれた看板が掛かってあった」

タイトルコール「幽霊養成講座うらめし家」

三味線の音がぴたりと止む。

おゆき「誰だい」

千夏「あ、すいません。チャイムかブザーがあったら鳴らそうと思ったんですけど見当たらなくて……。あの、こちら『うらめし家』さんですよ」

おゆき「だから、あんた、誰なんだい」

千夏「あ、すいません。あの、私、藤沢千夏です。実はこちらの幽霊養成講座を受けたいと思ってやってきました」

おゆき「あんたが？」

千夏「はい」

おゆき「冷やかしならお断りだよ」

千夏「冷やかしなんかじゃありません」

おゆき「ふん、どうだかね。最近はいいい加減な娘ばかりやってくるからねえ。この前だっ  
て…」

千夏「（遮り）待ってください。そのコがどんなコか知らないけど一緒になんかしないでください」

おゆき「へーえ、威勢はいいようだね」

千夏「本気ですから」

おゆき「ふん。それじゃあ、聞くけどさあ、あんたどうして幽霊になりたいと思ったんだ  
い」

千夏「化けて出てやりたい人がいるんです」

おゆき「惚れた男かい」

千夏「はい」

おゆき「どうして」

千夏「私のほかに女がいたみたいなんです」

おゆき「ふうん」

千夏「ふうんって、私にとってはすごい大問題なんです」

おゆき「ま、そういう場合、たいがいの女がそう言うねえ。で、あんた、どうしたいんだ  
い」

千夏「どうって……」

おゆき「化けて出た後だよ」

千夏「どうして二股掛けたのか、その訳を聞きます」

おゆき「で？」

千夏「で、怖がらせます」

おゆき「で？」

千夏「で……、で……」

おゆき「終わりがいい」

千夏「てか、まだ先があるんですか」

おゆき「（ため息をつき）情けないね、まったく。あんた、そんなんで幽霊になろうって  
の  
かい」

千夏「だめ……ですか？」

おゆき「ばか。だから最近の娘はだめだって言われんだよ。あんた、惚れた男を取り戻し  
たいって思ってたんじゃないのかい」

千夏「そりゃあ、そうですね。私、もう死んじやってるし……」

おゆき「なに言ってるんだい。惚れた男に死んでもらえばいいだけのことじゃないか」

千夏「ええっ！」

おゆき「いいかい、よくお聞きよ。幽霊になろうってんならねえ、相手を呪い殺すくらい  
の  
気概がなきゃだめなんだよ。わかるかい」

千夏「……はい」

おゆき「悪いことあ言わない。もう一回よく考えてから出直しといで」

千夏「待ってください」

おゆき「ん？」

千夏「今の話聞いて、自分の気持ちがはっきりわかりました。私、やっぱり先生みたいな人について幽霊にならなきゃだめなんです。お願いします。幽霊養成講座、受けさせてください。お願いします！」

おゆき「やれやれ。どうやら本気のようにだねえ」

千夏「はい、本気です！」

おゆき「わかったよ。そこまで言うんなら、受けさせてあげるよ」

千夏「やった！」

おゆき「なにすんだい！抱きつかないでくれよ。気持ち悪い」

千夏「すいません。つい感激しちゃって」

おゆき「（ため息をついて）わかったよ。じゃあ、その紙に必要なことを書いて料金を払っておくれ」

千夏「え！お金いるんですか」

おゆき「当たり前じゃないか」

千夏「だって、死後の世界なのに……」

おゆき「ばか言っちゃいけないよ。人から物教わるのにタダでどうぞ、なんて世界がどこにあると思ってるんだい」

千夏「すいません。けど、私、お金持ってないんです。カードもないし……」

おゆき「（鼻で笑い）あんた、この世界のこと、なんにも知らないんだね。そこで飛んで

みな

千夏「は？」

おゆき「ジャンプだよ、ジャンプ。その場で飛んでみなって言ってるんだよ。ほら！」

小銭の音がする。

千夏「あれ、なんで。なんでお金があんの。てか、これ、日本円じゃないし」

おゆき「（大声で笑い）ばかだね、ほんと。あんた『六文銭』って知らないのかい」

千夏「はあ……」

おゆき「そのお金はお葬式ん時に棺桶ん中に入れてもらうもんなんだよ」

千夏「へーえ」

おゆき「ま、普通は三途の川を渡る通行料として使われるもんなんだけどね」

千夏「じゃ、ここで払っちゃうってことは…」

おゆき「そ。あんたはもう極楽へは行けなくなるってこと。私みたいに幽霊や怨霊のままここに残るか、地獄へ落ちるかってことになるんだよ」

千夏「そっかあ……」

おゆき「どうすんだい？ やめるんなら今のうちだよ」

千夏「やります」

おゆき「途中でやめるって言い出しても返金しないよ」

千夏「大丈夫です。最後までやり抜きます」

おゆき「わかったよ。じゃあ、中へお入り」

千夏（語り）「こうして私はうらめし家で幽霊養成講座を受けることになった」

学校の始業チャイムが流れる。

千夏「なにこのチャイム。どう考えても、この日本家屋と合わない」

おゆき「なんだって？」

千夏「なんでもないです。始めてください」

おゆき「言われなかったって始めるよ。いいかい、最初にひとつ断っとくよ。こっから先

講座が終わるまでは私のことを『お師匠さん』と呼ぶように。わかったかい」

千夏「はい、和尚さん」

おゆき「ばか！ お師匠さんだよ。お師匠さん」

千夏「……すいません、お師匠さん」

おゆき「（ため息をつき）まったく。こんな調子でやってたんじゃ日が暮れちゃうよ。さ

あ、さっさと始めるよ」

千夏「お願いします」

おゆき「で」

千夏「でっ」

おゆき「なにぼやっとしてんだよ。講義が始まんだよ、生徒が気を効かせてやることがあんだろ」

千夏「え、あ、そかそか。起立。礼。着席。（小声で）私しか生徒いないのに……」

おゆき「なんか言ったかい」

千夏「いいえ、なんでもありません。お師匠さん」

おゆき「結構。じゃあ、一回目の講義を始めるよ。お題は幽霊としての身だしなみと立ち振る舞い。いいね」

千夏「はい」

おゆき「まずは身だしなみだよ。幽霊はね、装飾品や嗜好品を一切使っちゃいけない。だから、こういうものは全部はずす」

千夏「あ、だめ！ それ、亮から貰ったプラチナのネックレス……」

おゆき「（遮るように）なに言ってるんだい。その亮に化けて出てやるんだろうが」

千夏「だって……」

おゆき「だってでもくそもない！ 懐にあるもんもここへお出し」

千夏「あ、やめて！ タバコなしじゃ死んじゃう」

おゆき「（笑って）なに言ってるんだい。あんた、もう死んじゃってんじゃないか」

千夏「あ、そっか……」

おゆき「だいたいさ、タバコの煙くゆらせてる幽霊なんて聞いたことあるかい？」

千夏「（小声で）いじわる」

おゆき「なんだって？」

千夏「いいえ、なんでもありません」

おゆき「結構。じゃ、次はお化粧だね。これもさっきとおんなじ、余計なものはだめ」

千夏「あ、ちょっと」

おゆき「無駄な抵抗はおよし！」

千夏「あーあ。そのつけ睫毛、結構したのに……」

おゆき「ぶつぶつ言わないの。頬紅も口紅も。ほらほら、拭いてやるよ」

千夏「ぶぶぶ……」

おゆき「よし。少しは幽霊らしくなってきたじゃないか。なんだい、怒ってるのかい」

千夏「いーえ」

おゆき「結構。さあ、どんどん行くよ。次は基本姿勢だね。いいかい、私の姿勢をよく見てまねて」  
「らん。ほら」

千夏「ええっと、こう？」

おゆき「ちがうよ、よく見て。両手は身体の正面。右手が下で左手が上」

千夏「こう？」

おゆき「もっと力を抜く」

千夏「じゃあ、こう？」

おゆき「飲み込みが悪い娘だねえ。ほら、もっとだらあんと」

千夏「だらあん」

おゆき「もっと」

千夏「だらあん、だらあん」

おゆき「あーあー、ばか面下げちゃって。せっかくの美人も台無しだよ」

千夏「ひどい！ お師匠さんがやらしてんじゃないですか」

おゆき「ばかだねえ。あたしや、顔の力を抜けだなんてひと言も言っていないよ。手だよ、手。ほらほら、続けて」

千夏「こうですか」

おゆき「もうちょっと」

千夏「じゃあ、こう？」

おゆき「うーん。まあ、一応よしとしとくかね」

千夏「あれ、ちょっと待って。お師匠さん、足は？ 足はどうしたらお師匠さんみたいに

きれいに消えるんですか」

おゆき「あのねえ、そんな一朝一夕にうまくいかないんだよ。いいかい、日々精進してれば、足なんてもんは自分で気を効かせて、自然に消えてってくれるもんなんだ」

千夏「（小声で）ほんとかよ」

おゆき「なんか言ったかい」

千夏「なんでもありません」

おゆき「さ、この姿勢を保ったまま発声練習だよ。腹の底から声を出す。いいかい、私の後について。はい。うらめしや〜」

千夏「うらめしやあ」

おゆき「うらめしや〜」

千夏「うらめしやあ」

おゆき「（手をぱんぱんと叩き）だめだめ。 子供のお遊戯じゃないんだよ」

千夏「……そんなこと言ったって」

おゆき「いいかい、あんたの男、亮って名前だったかい。そいつが自分の目の前に立ってると思ってたってごらん。さあ、もう一回」

千夏「うらめしやあ」

おゆき「全然だめだねえ……。だいたい、あんた、うらめしやって意味わかってんの？」

千夏「いや、そのう……」

おゆき「うらめしやは恨めしいんだよ。恨んでんだよ。あんた、亮を恨んでんだろ。あん

たが死んじまったことをいいことに、亮は浮気女とねんごろになってんだろ。浮気女は浮気女でさ、亮を独り占めできたって喜んでんだろ。それ考えたら、あんた悔しいんだろ。燃えてくるんだろ。その気持ちをぶつけてごらんよ」

千夏「うらめしや〜」

おゆき「それだよ、それ。もう一回」

千夏「うらめしや〜」

おゆき「そう。その調子」

千夏（語り）「こうして一回目の講義はなんとか終わった」

終業のチャイムが流れる。

千夏「起立、礼」

おゆき「ちよっと、お待ち」

千夏「はい？」

おゆき「この後あなたがくたばった場所を見といて」

千夏「え？」

おゆき「くたばった場所を自分の目で見とくと、あなた自身の怨念が自然に強くなるんだよ」

千夏「なるほど。でも、どうやって？」

おゆき「私があんたに妖術をかけてあげるから」

千夏「え、なに？ 痛いのですよ」

おゆき「えい！」

つむじ風が吹く。

千夏「ああーっ！」

つむじ風がやむ。

車が行き交う音。

千夏（語り）「気がつくと、私は自分が死んだ場所に降り立っていた。幹線道路の緩やか

なカーブ。ここで私の乗ったスクーターは転倒した。原因はスピードの出し過ぎ。そう、あん時は焦ってたんだ。亮が私以外の女をアパートに連れ込んでるって友達から聞かされた時、いても立ってもいられなくなったんだ。最初は嘘だと思っただけ、すぐ頭に閃くものがあった。見たことのないケータイのストラップやライター。買ったのって聞いた時、一瞬亮は戸惑った表情を見せた。あれは女からのプレゼントだったんだ。ううん、そうかどうかわかんない。とにかく亮のアパートへ行って、ほんとのこと確かめなきゃ。そう思って走った。なのに……」

千夏のスクーターが転倒する。

千夏（語り）「亮に会う前に死んじゃったんだ。まだ二十五になったばかりだったのに……」

乗用車が止まり、ドアが開閉する。

千夏「あれ？ 誰？ お母さん？」

今日子「千夏、今日あんたの大好きだったスイトピーを持ってきたよ。ほら」

千夏「お母さん！」

今日子「ずっと菊の花だとあんたも飽きちゃうでしょ。今、飾ってあげるからね」

千夏「お母さん、見えないの？ 聞こえないの？ ねえ！」

今日子「この花見るとお母さんね、カラオケボックスと一緒に松田聖子歌ったこと、思い出すんだよ。あんた、リアルタイムじゃなかったのに私よりずっと上手だったでしょ。ほんと、自慢の娘だったのに……」

千夏「お母さん……」

今日子「ごめんね、千夏。あんたのこと守ってあげられなくて」

千夏「……やめてよ。お母さん」

今日子「来週の一周忌は盛大にやってあげるからね」

千夏「一周忌？ 待って、どういふこと？」

今日子「じゃあね、千夏。また来るからね」

千夏「あ、お母さん」

ドアが開閉し、車が走り出す。

千夏（語り）「私はその場に立ち尽くしたまま、走り去っていく母の車を見送ることしかできなかった」

始業のチャイムが鳴る。

千夏「起立……、礼……、着席……」

おゆき「なんだい、なんだい、元気がないねえ。それじゃ、まるでお通夜じゃないか」

千夏「そりゃ、私はもう死んでんですから……」

おゆきが千夏の背中をひっぱたく。

千夏「いたーい」

おゆき「なにいじけてんだい。そんなことでどうすんだよ。ほらほら、きのうの晩のこと

話してごらん」

千夏「……偶然母に会えました」

おゆき「へーえ。そりゃあ、よかったじゃないか」

千夏「よくないですよ。私のこと、見えないし、声だつて聞こえないんです。あれじゃ辛  
いだけです」

おゆき「それはしょうがないだろ。あんたはもう死んじゃってんだから」

千夏「そうだ！ 私が幽霊になって、お母さんのところに化けて出りゃいいんだ」

おゆき「だめだめ、そんなの。いいかい、幽霊ってのはね、恨みつらみがあつて出るもん  
なんだ。大切に思ってる人ところへ化けて出て、その人に悪いことが起きたら  
どうすんだい。困んだろ」

千夏「……はい」

おゆき「他に感想は？」

千夏「あ、そうだ。びっくりしたことがあるんです。知らない間に私が死んで一年たつて  
るみたいなんです」

おゆき「ああ。なんだい、そんなことかい。現世とここは時間の流れ方がちがうんだよ。

あんたに言つてなかったかい」

千夏「聞いてません！」

おゆき「ぼやぼやしていると、あんたの亮君もすぐおとつあんなになっちゃうんだよ」

千夏「そんな……。それじゃ困ります！」

おゆき「だったら、少しでも早く一人前の幽霊におなり。あなたにはそれしかないんだ。わかったかい？」

千夏「……はい」

おゆき「声が小さい！」

千夏「はい！」

おゆき「よし、少しは元気になったようだね。じゃあ、今日は二回目の講義。登場の仕方に入るよ」

千夏「登場の仕方？」

おゆき「そう。幽霊はね、ただ出りやいってもんじゃない。ちゃんとなきやなんないんだ」

千夏「はあ……」

おゆき「いいかい。まずは音」

千夏「音？」

おゆき「いちいちオウムみたいに繰り返すんじゃないよ」

千夏「……はい」

おゆき「じゃ、まず基本的なのからいくよ。よくお聞き」

ヒュードドロロという音が流れる。

千夏「ああ、これ。オーソドックス、王道って感じですね」

おゆき「ふん。感心してる場合じゃないよ。あんたもやるんだよ」

千夏「やるって、いきなりは無理です」

おゆき「なに言ってるんだい。死者なら音くらい誰でも出せんだよ」

千夏「ええ？」

おゆき「びっくりしてないで、まずやってみる。ほら、下っ腹に力を込めて、両の手は本の構えからぶるぶると震わせる。で、心の中で自分が出したいと思う音を一生懸命念じてみるんだよ。さあ、やってみな」

千夏「はい。むむむ……」

ラッパのファンファーレが鳴る。

千夏「あ、鳴ったー！」

おゆき「ばか！ それじゃ甲子園の開会式だよ」

千夏「そんなこと言ったって……」

おゆき「さ、集中して。もう一回やってらん」

千夏「むむむ……」

豆腐屋の呼び込みラッパの音が弱々しく流れる。

おゆき「あんた！ 幽霊のこと、なめてんのかい」

千夏「なめてません！ 私、思いっきり真剣です」

おゆき「真剣な女がそんな間抜けな音出す訳ないだろ」

千夏「そんなあ……」

おゆき「とにかく。今日はもうひとつ教えることがあるから、今の音出しは後で何度も反

復練習しておくこと。いいね」

千夏「……はい」

おゆき「じゃあ、今日のもうひとつ。火の玉の出し方だよ」

千夏「（ぷっと吹き出す）」

おゆき「なに吹き出してんだい」

千夏「だって、火の玉なんて、いかにもだなあって思って」

おゆき「なに言ってるんだい。なにことも基本が大事なんだよ」

千夏「すいません」

おゆき「最近の幽霊と来たら、テレビから出てきたり携帯電話で怖がらせたりするのもし

るらしいけど、そんなもの、私に言わせたら邪道、下の下だよ。いいかい、幽霊

ってのはね、ちゃんとして自分の音を流し、火の玉を浮かべ、それから青白い顔で

『うらめしやく』って現れる。それが本道なんだよ。わかったかい」

千夏「わかりました」

おゆき「結構。じゃ続けるよ。そもそも火の玉ってのは……」

おゆきの言葉に重なるように、終業のチャイムが鳴る。

千夏（語り）「結局、二回目の講義は火の玉を出そうとするところで時間切れになって

しまった」

おゆき「あんた」

千夏「はい」

おゆき「今夜はあんたの男のところへ行ってきな」

千夏「え」

おゆき「男に会ってみて恨めしいって思うかどうか確かめといて」

千夏「けど……」

おゆき「なに迷ってんだい。大事なことなんだよ。あんたが本当に恨み殺したいと思っ

てんのかどうか。よくあるんだよ。男に会った途端、仏心が出ちまって殺すのを

ためらっちゃうってことが。私が言ってること、わかんだろ」

千夏「……はい」

おゆき「いいね。自分の気持ちをはっきりさせといて」

千夏「わかりました」

つむじ風が吹く。

千夏（語り）「私はお師匠さんの妖術で亮のアパートへと舞い降りた」

路面電車がゆっくりと通過していく。

千夏（語り）「線路沿いの2Kのアパート。ああ、懐かしい。だけど、外壁がクリーム色に塗り直されている。ちょっと待って。また、知らない間に現世の時間が流れたってこと？ まさか亮が引越しちゃったりしてないよね。私は慌てて銀色の集合ポストを確かめた。えっと、102号室、102号室……。あった！ 柳井亮。よかった。まだここにいる。ここに住んでるんだ」

ベスパが走ってきてブレーキをかける。

千夏（語り）「その時は突然やってきた。見慣れた赤いベスパがいきなり目の前に止まったのだ。二人でお金出し合って買った中古のスクーター。亮だ。亮が帰ってきたんだ」

ベスパのエンジンが止まる。

千夏（語り）「ヘルメットがはずされ、つるんとした顔が現れた。黒縁メガネとその奥に覗く少し垂れ気味のちっちゃな目。ああ、どうしよう。見るだけで涙があふれてきちゃう」

亮の靴音。

千夏「亮！ 私だよ、千夏だよ！ 待って、亮！ そうだ。むむむ……」

豆腐屋のラッパが寂しく鳴る。

亮「豆腐屋？」

千夏「ちがうよ！ お願い、気づいて……」

ドアが開閉する。

千夏「ああ、行っちゃった。（泣き笑い）豆腐屋か……。ほんと、これじゃ豆腐屋だよな

あ

豆腐屋のラッパが小さく鳴る。

千夏（語り）「打ちのめされ私はそのまま帰ろうとした。でも、102号室の表札を目にした瞬間、私は動けなくなってしまった。柳井亮と書かれた隣に寄り添うように柳井理名と書かれてあったからだ。柳井理名、柳井理名……。やっぱりそうだったんだ。許せない、許せない、許せない！」

豆腐屋のラッパが再び鳴る。

亮の声「しつこい豆腐屋だなあ」

千夏「豆腐屋じゃない！」

始業のチャイムが鳴る。

千夏「起立！ 礼！ 着席！」

おゆき「びっくりするじゃないか。今日はやる気まんまんだね」

千夏「はい。やる気120パーセントです」

おゆき「（鼻で笑い）そうかい。はっきりさせてきたってことだね」

千夏「はい。恨み殺してやります」

おゆき「わかったよ。じゃあ始めるよ」

千夏（語り）「それからの私は幽霊修行に精を出した。火の玉の出し方、幽霊としての現れ方、消え方。教えられる通り一生懸命がんばった。うまく行かない時は何度も何度も心の中で唱えた。柳井理名、柳井理名と。そして……」

終業のチャイムが鳴る。

千夏「起立、礼」

おゆき「お疲れさん。おしまいだよ」

千夏「おしまいって……」

おゆき「幽霊養成講座修了ってことだよ」

千夏「ほんとですか！」

おゆき「ああ。出来不出来は置いとくとして、ひと通りのことはやったってことだよ」

千夏「じゃ、私、幽霊になれたってこと？」

おゆき「ああ、そうだよ」

千夏「大丈夫ですか。私、全然実感ないし、自信ないし……」

おゆき「なに言ってるんだい。自分の足元よくごらんよ」

千夏（語り）「私は思わず息を飲んだ。いつの間にか自分の膝から下がきれいに消えてなくなっていたのだ」

おゆき「どうだい、わかったかい」

千夏「お師匠さん……」

おゆき「後はあんたが自信を持って幽霊に成り切ること。いいね」

千夏「はい」

おゆき「恨み殺すって気持ちはどうだい。変わりないかい」

千夏「はい。亮を恨み殺して絶対この世界で一緒になってみせます」

おゆき「えらいよ。よく言った。それじゃ、あんたにこれを貸したげるよ」

千夏（語り）「お師匠さんは自分が着ている着物の腰紐を解き、それを私に手渡した」

おゆき「それを巻いて男のところへおゆき。で、男に出会ったら、それを男の首目掛けて  
放り投げておやり。そうすりゃ、後はその腰紐が勝手に男の首を締めつけてくれ  
る」

千夏「この紐にそんな力が……」

おゆき「ああ。今まで何人も男の首を締め上げてきたんだ」

千夏「待ってください。首を締めるってことは亮、苦しみながら死ぬってことですか」

おゆき「大丈夫だよ。その腰紐はね、相手が苦しまないよう、優しく優しく締め上げてく  
れる優れものなんだよ」

千夏「（小声で）なんか怪しい通販ものみたい」

おゆき「なんか言ったかい」

千夏「なんでもありません」

と、突然腰紐が蛇のようにシュウと音を立てる。

千夏「うわっ！ これ、生きてる！」

おゆき「ばか。なに放り出してんだよ。早く拾いな。噛みつきゃしないから」

千夏（語り）「私は恐る恐る放り出した腰紐を拾い上げた」

おゆき「どうだい、大丈夫だろ。そいつはご主人様には従順なんだから」

腰紐が再びシュウと音を立てる。

千夏「でも、まだ唸ってんですけど……」

おゆき「大丈夫だよ。頭撫でてやってごらん。なでなでって」

千夏「なでなで」

おゆき「そ。大人しくなってきたろ」

千夏「なでなで」

腰紐が再びシュウと音を立てる。

千夏「お師匠さーん」

おゆき「情けない声出してんじゃないよ！ そんならい活きがよくなきゃ、あんたの願い  
なんか叶えてくんないよ」

千夏「……はい」

おゆき「それから、これは大切なことだからよくお聞き。いいかい、まかり間違っても、  
途中で仏心を出したりするんじゃないよ。もしそんなことになったら、その腰  
紐はあんたが裏切ったんだと思い込んで、今度はあんたの首目掛けて襲ってく  
ることになるんだからね」

千夏「そんな脅かさしないでくださいよ。だいたい、私はもう死者だから首を締められても  
死ぬってことはないじゃないですか」

おゆき「ばかだね。なに呑気なこと言ってんだい。あんたの場合はね、そのまま地獄に落  
ちることになるんだよ」

千夏「え、地獄？」

おゆき「そうだよ。そいつはそれだけの力を秘めてんだよ」

千夏「そうなんだ……」

おゆき「なんだい、怖じ気づいちゃまったのかい」

千夏「いえ……」

おゆき「いいかい、最後にもう一回聞くとよ。あんたは柳井亮を恨み殺しに行く。間違いな  
いね」

千夏「はい、間違いありません」

おゆき「よし。じゃ、しっかりやってきな」

千夏「このまま行っていいんですか」

おゆき「そうだよ」

千夏「じゃあ、お師匠さん……」

おゆき「なんだい？ 泣いてんのかい」

千夏「（涙声で）ごめんなさい。短い間でしたけどありがとございました。それ言おう  
と思ったら泣けてきちゃって」

おゆき「なに今生の別れみたいなこと言ってんだよ。その腰紐、役目が終わったら返しに  
くんだろ」

千夏「あ……、そうか」

おゆき「まったく。しっかりしな」

千夏「はい」

三味線の音が流れる。

千夏（語り）「お師匠さんの三味線に送られながら、私は出発した。絶対亮を恨み殺してやる。そう心の中で念じながら」

路面電車がゆっくりと通過していく。

千夏（語り）「私は亮のアパートに舞い降りた。線路沿いの2K。あれ？ ちょっと待ってよ。クリーム色の外壁がくすんでるような気がする。嘘！ また時間が流れたってこと？ 私は慌てて集合ポストを確かめた。102号室、柳井亮。大丈夫。そのままだ。そう思った時、その隣に書かれた文字が私の目に飛び込んできた。柳井理名。前は表札だけだったのに、ポストまで進出してきてるじゃん。くそーっ。もう頭きた。絶対許さないっ！」

ヒュードロドロという音が流れる。

千夏（語り）「音楽よし！ もう豆腐屋なんて言わせないからね」

シュボという音。

千夏（語り）「火の玉よし！ 足もよし！ 私は一旦自分の姿を消して102号室のドアをそのまますっとすり抜けた。火の玉の灯りで玄関脇の台所が浮かび上がる。ライトグリーンの水切りカゴに油で汚れたままのガスコンロ。なーんだ、思ったよりも変わってないじゃん。こういうところをきれいにしてないなんて、柳井理名、あんまりたいした女じゃないな。ええっと、台所の向こうに引き戸がふたつと。昔と一緒だとしたら、右が寝室だ。あ、待てよ。寝室ってことは柳井理名も寝てるってことだよな。二人一緒に恨み殺しちゃうってこと？ けど、一緒に殺しちゃったら、死んでも仲良く一緒のままってことになるんだよね。えー、それじゃ意味ないじゃん。どうしよう。どうすりゃいいんだよう」

と、その時、引き戸がらっと開く。

亮「うああ、火の玉！」

千夏（語り）「（舌打ちし）やばい、亮だ。しょうがない。姿を現すしかないか」

ヒュードロドロロという音が流れる。

千夏「うらめしや〜」

亮「うわっ!」

千夏「亮〜、私だよ〜」

亮「ち、ち、ち、千夏……」

千夏「私が見えるんだね〜」

亮「ああ……」

千夏「どうして二股かけたんだよ〜」

亮「ご、ご、ごめん。つい誘われて。け、け、けど千夏に悪いと思って、す、す、すぐに

その女と別れようとしたんだけど……」

千夏「別れてないでしょ〜」

亮「ごめん。実は……」

千夏「（遮り）言い訳なんか聞きたくないんだよ。私、もう死んじゃったんだよ。亮

んとこへ行く途中で事故ちゃったんだよ〜」

亮「ごめん! ほんと悪かったと思ってる」

千夏「ほんとに悪かったって思ってたんなら、私んとこへ来てよ〜」

亮「それだけは勘弁してくれ。な、頼む」

千夏「いくら頼んでもだめだよ。今すぐ楽にしてあげるよ〜」

千夏の腰紐がシューという音を立てる。

千夏（語り）「私は腰紐を解き、亮の首目掛けてそれを放り投げた」

ひゅんという空気を切る音。

千夏（語り）「腰紐が亮の首に巻きついた」

亮「ううっ!」

千夏「苦しくないでしょ〜。すぐ終わるからね〜」

亮「お、俺、今死ぬ訳にはいかないんだ!」

千夏「亮〜、見苦しいよ〜」

亮「ち、ち、千夏!」

千夏「亮〜」

突然火がついたように赤ん坊の泣き声上がる。

千夏「赤ちゃん……」

亮「（絞り出すような声で）り、理名だ」

千夏「理名？ 理名って奥さんの名前じゃないの」

亮「ちがうんだ……」

千夏（語り）「私は一旦腰紐を亮の首から解いた」

亮「（激しく咳き込む）」

千夏「亮。どういうこと？ 説明して」

亮「（荒い息のまま）わかったよ。じゃあ、こっちに来てくれ」

千夏（語り）「亮に続いて寝室に入ると、見慣れたベッドの隣にベビーベッドが置いてあ

った。亮はそこから泣き続ける赤ん坊を優しく抱き上げた」

亮「よし、よしよし。もう怖くない、怖くないよ」

赤ん坊の泣き声が収まっていく。

千夏「その赤ちゃんが理名？」

亮「ああ」

千夏「じゃ、浮気してた女に子供ができて別れられなくなったってこと？」

亮「ああ。責任取ってって迫られて」

千夏「女は？」

亮「出てった」

千夏「なんで！ 亮に迫って一緒になって、それでその子産んだんでしょ」

亮「ああ」

千夏「じゃあ、どうして」

亮「ほかに好きな男ができたって」

千夏「なにそれ。なんでそうなの？」

亮「俺も最初そう思ったよ。勝手な女だなんて。けど、よく考えたら、俺も同じだって気がついたんだ。千夏がいたのに浮気して、その女を妊娠させちゃったんだからな」

千夏「それはそうだけど……」

亮「バチが当たったんだよ、俺。大好きな千夏を裏切って、それがもとで千夏を死なせちまったんだから」

千夏「亮……」

亮「この子、俺の実家に預けることも考えたけど、それじゃ、俺いつまで経ってもだめだなんて思っただけ。がんばって俺が育てなきゃって思ってたんだ。だから、頼む。俺を殺さないでくれ。勝手だと思っただけ、俺、今死ぬ訳にはいかないんだ」

千夏「……そうだったんだ。私、全然知らなかった」

腰紐がシューウという音を立てる。

亮「千夏！ 危ない！」

ひゅんという空気を切る音。

千夏（語り）「一瞬なにが起きたのか自分でもわからなかった。気がつくと腰紐が私の首に巻きついていて。私の裏切りを嗅ぎ取ったんだ」

亮「千夏！」

千夏「（絞り出すような声で）来ちゃだめ」

亮「けど……」

千夏（語り）「腰紐は私の首を締め上げてきた。だけどなぜか苦しくなかった。目の前がどんどん白くなっていく。ああ、このまま私は地獄へ落ちていくんだあ」

三味線の音が流れてくる。

おゆき「なにやっつてんだい」

亮「うわあ。べ、べ、別の幽霊！」

千夏「（絞り出すように）お師匠さん」

おゆき「しょうがないねえ、まったく」

千夏（語り）「お師匠さんは私の首に巻きついて腰紐に手を掛けた。すると、腰紐は

あつという間に消えてしまった」

おゆき「あーあ、腰紐が台無しだよ」

千夏「（咳き込みながら）お師匠さん、どうして」

おゆき「どうして？ あんたがいつまでたっても腰紐返しに来ないからだよ。大方ドジで

も踏んでんだらうって思ってたさ」

千夏「……すいません」

おゆき「まあ、いいさ。新しい腰紐を貸してやるから、それでもう一回……」

千夏「（遮るように）お師匠さん、それはできません」

おゆき「なんだって」

千夏「私、やめます。亮を恨み殺すこと」

おゆき「なに言っつてんだい。私と約束しただろ。約束を破ると地獄行きなんだよ」

千夏「わかってます」

おゆき「この男はあんたを裏切つたんだよ。それであんた、死んじまったんだろ。なのに

この男は今あんたに命乞いしてんだよ」

千夏「わかってます」

おゆき「あんたが地獄に落ちるつてわかってて、そう言っつてんだよ」

千夏「わかってます」

おゆき「わかってないだろ！」

千夏「わかってます！ 全部、全部わかってます！」

おゆき「あんた、そこまでして……」

千夏「……はい」

突然強風が吹き出し、地鳴りのような恐ろしい轟音が響いてくる。

理名がまた激しく泣き始める。

おゆき「来たよ！」

千夏（語り）「突然、私の目の前にブラックホールのような真っ暗な洞穴が大きく口を開けた。今にも吸い込まれそうだ」

おゆき「地獄の入り口だよ！ 私にだって止められないんだよ！」

千夏（語り）「私は亮に近寄った」

亮「千夏、頼む！ 助けてくれ」

千夏「亮、大丈夫。私、もう行くから」

おゆき「あんた、まさか！」

千夏「亮、理名ちゃんを私みたいになすっごくいい女に育ててあげなよ」

亮「千夏……」

千夏「約束だよ」

亮「わかった。約束する」

おゆき「ちょっと、あんた！」

千夏（語り）「私は自分から地獄の入り口に進み出た」

地鳴りのような轟音が一層大きくなる。

おゆき「ばかなことすんじゃないよ！」

千夏「お師匠さん、ごめんなさい！ でも、でも、これでいいから！」

おゆき「お待ち！」

千夏「亮、じゃあね！」

亮「千夏！」

千夏の悲鳴やおゆきの怒声、亮の叫び声や理名の泣き声。すべての声を轟音が飲み込んでいく。

そして、嵐が去るように轟音が収まっていく。

千夏（語り）「気がつくのと、私は一人横たわっていた。ここが地獄？ でも、閻魔さんも

赤鬼青鬼もない。ちょっと待って。ここは、ここは！」

始業のチャイムが鳴る。

おゆき「気がついたかい」

千夏「お師匠さん！ どうして……」

おゆき「さあねえ。うちへ帰ってきたら、あんたが呑気な顔してそこに寝転がってたんだ  
よ」

千夏「どういうことですか！」

おゆき「ばか。こっちが聞きたいくらいだよ。ただね、ひよっとしたら、これが一役買っ  
たのかもしれないよ」

千夏「絵馬？」

おゆき「そう。絵馬だよ」

千夏（語り）「私はお師匠さんから絵馬を受け取った」

おゆき「うちの前に落ちてたんだ」

千夏「これは……」

おゆき「そう。あんたのお母さんのだよ」

千夏（語り）「絵馬には見慣れた文字が書いてあった」

今日子の声「千夏は素晴らしい娘でした。この世に未練がいっぱいあると思いますが、ど  
うか迷うことなく極楽へ行かせてやってください。よろしく願います」

おゆき「そんな絵馬がお寺にいっぱい結んであったらしいよ」

千夏「お母さん……」

おゆき「まったく、母は強しだね。そんな話聞いたことがない」

千夏「お母さん……」

おゆき「ちよっと、どこ行くんだい！」

千夏「離して！ お母さんのところに！ お母さんのところに！」

おゆき「いい加減におしー！」

千夏の頬が打たれる。

千夏「お師匠さん……」

おゆき「あんた、お母さんの気持ちがわかんないのかい」

千夏「でも……」

おゆき「でもくそもないんだよ。ほら、涙拭いて」

千夏「はい」

おゆき「ああ、ああ。鼻も拭いて。さあ、表を」

千夏（語り）「私は言われた通り表を見た。屋敷の門が開け放たれ、その向こうを流れる

河には船頭を乗せた小舟が一艘接岸しているのが見えた」

おゆき「お迎えだよ」

千夏「極楽……」

おゆき「そうだよ。お母さんのことを思うのなら、そのまま黙って行くんだ。いいね」

千夏「……お師匠さん」

おゆき「ぐずぐずしない！ これ持って」

千夏「六文銭……。だって、これ……。お師匠さん返金しないって」

おゆき「ばか。極楽行く娘から金なんか取れるかい」

千夏「でも、お師匠さんのおかげで私、幽霊になれたんだし……」

おゆき「なに辛気くさいこと言ってるんだよ。自分の姿をよく見てごらんよ」

千夏「足だ！ 足がある！」

おゆき「わかったかい。あんたにやもう『うらめしやく』も火の玉もヒュードドロドロも必

要ないってことだよ」

千夏「お師匠さん、私……。私……」

おゆき「めそめそすんじゃない！ とっとなおゆき」

千夏「はい。じゃ、行きます。お師匠さん、お元気で」

おゆき「ばか。幽霊に向かって言う言葉じゃないだろ」

千夏「あ、そっか」

おゆき「もう、いいから早く。舟が出ちまうじゃないか」

千夏「はい」

千夏が小走りに駆けていく。

千夏（語り）「私は一度も後ろを振り返らず小舟に向かって走った。お師匠さんが見送りに出てこないことがわかっていたからだ。私は船頭さんに六文銭を手渡し小舟に乗り込んだ」

櫓の音。

三味線の音が流れ出す。

千夏（語り）「小舟が河へと漕ぎ出されると同時にお師匠さんの三味線が聞こえてきた。私はお師匠さんに別れの合図を送ろうと必死で念じた。幽霊じゃなくなってもこれくらいはできるはず……」

豆腐屋のラッパが鳴り響く。

千夏「やった！ 鳴った」

三味線の音がぴたりとやむ。

千夏（語り）「お師匠さん、聞こえた？ 聞こえたでしょ」

再び鳴り響く豆腐屋のラッパ。

千夏（語り）「色々ありがとう。お師匠さんさよなら」

千夏の思いに応えるかのように、再び三味線は鳴り始めるが、その音色は次第に小さくなっていく。

櫓の音だけが残って……。

（おわり）

# 幽霊養成講座「うらめし家」

2014年3月16日 発行

著者 坂東誠一

発行者 李鳳龍(オオハラ.李.ヒデハル)

発行所 描楽書蔵

郵便番号 135-0016

東京都江東区東陽1-28-13-401

お問い合わせ [oohara.lee@ka-kuzo.jp](mailto:oohara.lee@ka-kuzo.jp)

サイト <http://www.ka-kuzo.jp>

本作品のコピー、印刷、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。  
本作品を代行業者等に依頼してコピー、印刷、スキャン、デジタル化する事はたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。